京都教区時報

カトリック京都司教区
広報委員会
京都市中京区
河原町通三条上る
TEL 075-211-3025
FAX 075-211-3041
honbu@kyoto.catholic.jp

https://www.kyoto-catholic.net/

主のご降誕のお喜びを申し上げます

2026年 司教年頭書簡を受けて（最終回）

第11回　私たちの宿屋に、彼らのための場所はあるでしょうか？



©Vatican Media

クリスマスが近づくにつれ、神が私たちの歴史の中に身を低くして来られ、人間となられたあの瞬間を思い起こし、お祝いできる喜びに私たちは満たされます。家々や教会がクリスマスツリーや馬小屋の飾りで彩られるとき、祈りと心の静まりという、この季節ならではの特別な息吹が感じられるようになります。

しかし、この季節の華やかな光の中で、私たちは馬小屋の貧しさを忘れてはなりません。聖ヨセフと聖母マリアは、無関心という試練に直面されました。何時間も歩いて場所を探し、叩いた扉は開かれず、ただ沈黙だけが彼らを迎えました。彼らのための宿はなかったのです。あの夜、救い主は最も卑しい場所、動物たちに囲まれた家畜小屋で生まれなければなりませんでした。二人の旅人の声に耳を傾ける者は誰もおらず、多くの人々が自分の家に光を迎え入れる機会を逃してしまったのです。

この現実は、現代の私たちにも直接問いかけています。大塚司教が年頭書簡の第11項で思い出させてくださったように、私たちは「すべての声に耳を傾ける教会」となるよう招かれています。小教区の共同体とは、本来、最も弱い立場にある人々、子どもたち、高齢の方々、病気の人、そして移民の方々が「温かく迎えられている」と感じられる家であるべきです。しかし悲しいことに、あのベツレヘムの夜と同じ利己主義に私たちが囚われ、最も助けを必要としている人々に対して、自分の心や教会の扉を閉ざしてしまうことがあります。

今年のクリスマスを、単なる毎年の行事として終わらせてはなりません。この招きは、私たちのまなざしを新しくすることです。最も傷つきやすい人々の声に耳を傾け、心の扉を大きく開こうではありませんか。聖霊のうちにおける対話を私たちの教会の活動の中でさらに推し進め、知恵をもって識別していきましょう。私たちの共同体のあらゆる隅々、そして何よりも私たち自身の魂を、イエスが再び生まれることのできる温かい「宿」にしていきましょう。

皆様へ。聖なる、そして喜びあふれるクリスマスをお迎えください！



三重南部ブロック担当司祭
グアダルペ宣教会
ホセ・A・ゴンザレス

12
2026

京都教区90年、そのはじまり

― 祈りと決断、戦争の中で受け継がれた信仰 ―

京都司教　十パウロ大塚喜直

第４回 メリノール宣教会の３人の若き宣教師　―学ぶことから始まった宣教―

叙階されたばかりの３人



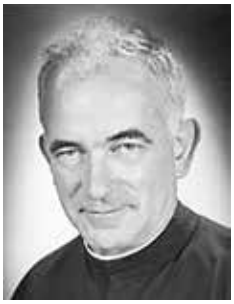
ウィリアム・V・ウィットロー神父

第２回では、メリノール宣教会に京都・滋賀への道が開かれた経緯を、第３回では、京都に受け継がれてきた信仰と、パリ外国宣教会が築いた礎をたどりました。今回は、その歩みを受け継ぐことになる３人の若い司祭に目を向けます。

３人の日本派遣が決まったのは、1933年５月。まだ司祭になる前でした。ウィリアム・V・ウィットロー神父（William V. Whitlow, M.M.、1904－1957）、エヴェレット・F・ブリッグス神父（Everett F. Briggs, M.M.、1908－2006）、ジョン・J・ウォルシュ神父（John J. Walsh, M.M.、1906－1997）です。



エヴェレット・F・ブリッグス神父



ジョン・J・ウォルシュ神父

６月11日に叙階された３人は、それぞれ28歳、25歳、27歳でした。司祭としての第一歩が、そのまま海を越える旅につながっていました。まだ言葉も暮らしも知らない国に、自分の生涯を託していく若者たちでした。

それ以前にも、日本語を学ぶために来日した会員はいました。しかし、その目的は、朝鮮や満州、米国などで暮らす日本人への宣教に備えることでした。日本そのものを任地として派遣された最初の会員が、この３人でした。

父との別れを胸に

７月30日、メリノール会本部で、海外へ向かう15人の宣教師の出発式が行われました。叙階の喜びがまだ胸に残るなか、家族や仲間との別れの時を迎えました。新しい司祭の誕生を喜んだ家族にとっても、それは、愛する息子を遠い国へ送り出す日でした。

なかでもウォルシュ神父は、深い悲しみを抱えていました。父が息子の叙階式へ向かう途中で自動車事故に遭い、その翌月に亡くなっていたのです。父を見送って間もない日本への旅立ちでした。その悲しみを胸に、彼は２人の仲間と太平洋を渡り、８月下旬、横浜に降り立ちました。宣教師の歩みは、悲しみが消えてから始まるのではありません。悲しみを抱えたまま、それでも主の招きに応えて一歩を踏み出す。その姿を、ウォルシュ神父の旅立ちに見ることがで



横浜港に入港するエンプレス・オブ・ブリテン号　1934年
(参考・当時の客船入港風景　3人の宣教師が乗った船ではありません)

きます。
　その年の３月、日本は国際連盟からの脱退を通告していました。３人の宣教生活は、日本と国際社会との隔たりが深まりつつある時代に始まりました。

東京に整えられた生活の拠点

　３人は、到着してすぐに京都や滋賀の教会を任されたわけではありません。メリノール会は、新しい宣教地域が正式に設けられる前に、まず日本語と日本の習慣を学ばせる方針を立てました。そのため、最初の生活拠点は東京に置かれました。


ヘンリー・Ｊ・
フェルセッカー神父

　受け入れの準備を担ったのは、以前、日本で語学を学んだ経験のあるヘンリー・Ｊ・フェルセッカー神父（Henry Ｊ. Felsecker, MM.、1905－2000）です。総長の指示により、満州での宣教活動を一時離れ、1933年６月に東京へ来ました。そして、教皇使節館（現在の駐日ローマ教皇庁大使館）のジョセフ・ハーレー神父（Joseph Hurley）の助けを得て、当時の東京市大森区新井宿に借家を用意しました。
　住まいには、生活に必要な最低限のものが整えられていました。ハーレー神父が紹介した料理人は英語もある程度わかり、日本語をまだ話せない３人にとって、心強い支えとなりました。福音を伝えに来た彼らの暮らしは、まず、周囲の人々に助けられることから始まったのです。

記録に残された宣教の始まり

　今回参照している英語資料は、フェルセッカー神父が書き残した、1933年から太平洋戦争開戦までの日本宣教の記録です。そこには、派遣や訪問の経緯とともに、住まいを探し、日々の暮らしを整える仕事も記されています。宣教の始まりを支えた、こうした人々の働きにも目を向けたいと思います。

　荷を解く間もなく、フェルセッカー神父は３人を、教皇使節館、シャンボン東京大司教（Jean-Baptiste-Alexis Chambon, M.E.P.、1875－1948）の住居、カトリック学校、そして２つの教会へ案内しました。３人にとって、日本の教会を知り、そこで働く人々と出会う最初の機会でした。これから暮らす国を理解するための学びは、すでに始まっていました。


空襲前の旧東京大司教館

教える前に、学ぶ旅

　来日から数日後、３人は大阪行きの列車に乗りました。カスタニエ大阪司教にあいさつし、その後、将来の宣教地である京都・滋賀を訪れるためです。３人にとって、派遣先として聞いていた土地を初めて自分の目で見る旅が、いよいよ始まりました。
　３人の宣教師は、福音を伝えるために、まず日本語と日本の習慣を学ぶことから歩みを始めました。その姿は、相手の言葉に耳を傾け、その暮らしを知ろうとすることの大切さを、今日の私たちにも伝えています。京都教区の歴史を受け継ぐ私たちも、３人の若い司祭が踏み出したこの第一歩に、宣教の原点を学びたいと思います。


1933年当時、東京から大阪までの列車の旅は、大幅なスピードアップが実現し、それまでの11時間から８時間20分に短縮された

　次回は、大阪で迎えられた３人が、初めて京都を訪れた日をたどります。

オスカル・ロメロ　一場　修師
司祭叙階25周年
銀祝感謝ミサ
９月12日　河原町教会

秋雨の合間の秋晴れに恵まれた９月12日、一場神父様の司祭叙階銀祝感謝ミサが、大塚喜直司教の司式にて行われました。

一場神父様と一緒に感謝を捧げる方々で、聖堂はいっぱいになりました。

一場神父様は日本に残られた唯一のマリスト会司祭ですが、京都教区の一員として献身的に働いてくださっています。

「いつもまじめで、さぼらず、やることはちゃんとやる一場神父様（大塚司教談）」の上に、神様の豊かな祝福がありますように。



感謝とお詫び

一場　修

私は今年、司祭叙階の銀祝を迎え、９月12日に河原町教会において、大塚司教様司式の感謝ミサで、皆様にお祝いしていただきました。さまざまな形で、私の銀祝をお祝いしてくださった方々に、心から感謝申し上げます。

25年間司祭として教会に奉仕できたことは、大きな恵みです。25年間、祈りや、その他の形で、私の歩みを支えてくださった方々に心から感謝申し上げます。それと同時に、この25年間に、たくさんの人を傷つけてきたことも事実です。その意味で、銀祝という時は、悔い改めの時だと思っています。自分の弱さを認めず、強がった時、だれかを傷つけていたと思います。司祭は、自分の強さを誇るのではなく、自分がいただいている神の恵みを、まわりの人と分かち合うことで、あかしするよう求められていると思います。

銀祝を迎えた今、自分の弱さや限界を、謙虚に認めたいと思います。そして、神の恵みの大きさを味わいたいと思います。味わった恵みを、日々の奉仕を通して出会う人々と分かち合いたいと思います。最後に、私が傷つけてしまった方々に、心からお詫び申し上げます。

大塚喜直司教ミサの説教より（一部抜粋）

２００１年、私が司教として初めて司祭叙階を授けた方が、一場神父様でした。あれから25年がたちました。25年とは、ただ年月が過ぎたということではありません。喜びの日も困難な日も、自分の力の限界を知らされた時も、神の呼びかけに応え続けてきた一日一日の積み重ねです。今日、私たちはその歩みのすべてを神にささげ、ここまで導いてくださった主を賛美したいと思います。

一場神父様は自分を中心に置くのではなく、託された人々のもとへ出かけ、その声に耳を傾け、必要とされるところに身を置く。人の話を聴き、祈りをともにし、悲しむ人のそばにとどまり、答えが見つからない時にも一緒に歩く。その静かな奉仕によって、キリストの慰めと希望を届けてこられました。

銀祝は、これまでの歩みを感謝する日であるとともに、神の呼びかけにもう一度「はい」と答える、新たな出発の日です。これからもマリアのようにキリストを心に宿し、助けを必要としている人のもとへ歩み続けることができますように。私たちも祈り、支え、力を合わせながら、ともに福音を担ってまいりましょう。



社会への福音宣教
小教区評議会役員研修会・交流会

京都教区では小教区評議会役員養成を目的に、毎年オンラインの研修会と対面での交流会を開催しています。今年のサイクルテーマは③「社会への福音宣教」でした。

●小教区評議会役員研修会
テーマ「貧しい人々への愛から、社会の中で福音を生きる」

5月16日、オンライン

今回の研修会では、大塚喜直司教より、教皇レオ十四世の使徒的勧告『Dilexi te（わたしはあなたを愛している）』をもとに、社会への福音宣教についてお話がありました。

大塚司教は、「福音宣教は教会の中だけで行う活動ではなく、家庭や職場、地域社会など、日々の暮らしの中で人を大切にすることから始まる。『貧しい人々への優先的選択』とは、経済的に困窮している人だけでなく、孤独を感じている人、病気や障がいのある人、外国にルーツをもつ人など、社会の中で声を上げにくい立場にある人々に目を向け、その人たちの側に立って考えることである」と話され、「一人ひとりを大切な存在として受け止め、ともに歩む姿勢が求められる」と強調されました。

また、役員の役割について、「単に教会を運営・管理することではなく、『共同体がより福音的になるよう支えること』であり、評議会は、情報共有や意思決定を行うだけでなく、『神が何を望んでおられるか』をともに識別する場である」と話され、さらに、役員一人ひとりに、「『教会は初めて来た人にとって入りやすいか』『見えにくくなっている人はいないか』『安心できる場になっているか』という問いを、常に持ち続けて欲しい」と呼びかけられました。

講話を受けて、参加役員から、生きづらさを抱える人との関わりや、高齢期の課題を抱える信徒への対応、教会に来られなくなった人への訪問、多国籍の共同体づくりなどの実践が紹介され、参加者は講話の内容への理解をより深めることができました。

●小教区評議会役員交流会
テーマ「教会の中にある社会の現実に気づく」

9月26日、河原町カトリック会館

参加者44名（役員39名、司祭5名）

上記の役員研修会の際に提示された「私たちの小教区で見えにくくなっている人は誰でしょうか」「その人が安心して集えるために、役員として何から始められるでしょうか」という2つの問いをテーマに、霊における会話の方法で分かち合いを行いました。

分かち合いの発表では、若い世代の減少や高齢化、交通手段の不足、外国人信徒や教会から離れた人々への関わりなど、各小教区が抱える課題が挙げられました。また、忙しさの中で「見ない」ようにしてしまっていないか、「共に歩む」という教会本来の姿を見失っていないかとの反省も語られました。具体的な取り組みとしては、一人ひとりに関心をもち、それぞれの状況に応じて対応する、ミサでの奉仕を通しての交流、バリアフリー化などが提案されました。さらに、役員だけで課題を抱え込まず、互いに協力して負担を分かち合うこと、祈りを大切にすることも確認されました。短い時間でしたが、小教区を越えて役員が集い、分かち合い、気づきを共有する機会となりました。



福音宣教企画室

集まろう！　～最高気温よりアツい夏～

中学生会夏合宿　唐崎メリノールハウス　８月19日㈬～20日㈭

今年の京都教区中学生会の夏合宿は、唐崎メリノールハウスで開催しました。5月からリーダーたちが準備を進め、３人の中学生とともに２日間を過ごしました。

これまで夏は「広島平和巡礼」を行ってきましたが、広島巡礼は真夏を避けて春に行いましたので、今回の夏合宿は分かち合いの時間を設け、中学生同士やリーダーとの交流を中心にした新しいスタイルで実施しました。少人数だからこそ、一人ひとりと話し、一緒に過ごす時間を大切にすることができました。

合宿では、能登に届けるステンドグラスを制作しました。色や形を考え、遠くにいる方々へ思いを寄せながら、心を込めて取り組みました。また、リーダーがこの合宿のために作ったテーマソング（ひとりじゃないさ～希望の光へ～）を皆で歌いました。一緒に歌った時間も、参加者にとって思い出の一つになったと思います。



例年とは違う形での開催でしたが、分かち合いと交流、そして制作を通して、新しい経験ができた２日間でした。参加した中学生にとっても、楽しい思い出として心に残っていたらうれしく思います。合宿を支えてくださった皆さんに、心より感謝申し上げます。

中学生会リーダー　菊川 あがた

人生の午後に…“主とともに、いま、神の声を聴く”

盛年（後期青年）のための１泊黙想会　唐崎祈りの家　９月20日㊐～21日㊊㊗

「盛年のための黙想会」を開催しました。以前から行っている「青年のための黙想会」（対象年齢が18歳から35歳）に加え、教会共同体の中で、取り残されがちな年齢層（35歳以上の後期青年）対象の黙想会を昨年から行っています。今回は、７名の参加があり、菅原友明師の指導でテーマにそってマタイ福音書から４つの講話を聴き黙想しました。イ・ウォンギュ師も２日間一緒に参加してくださり、締めくくりのミサをささげてくださいました。日々の喧騒から抜け出し、美しい琵琶湖の畔で静かに神の声を聴いた恵みの２日間でした。

参加者の感想から

■まるで美しい音楽のような、すばらしい時間でした。イエスのもとに集まる「黙想会」の出来事は、他の社会的出来事とは異なり、一時的ではなくずっと続いています。委員会の新しい取り組みは、イエスの御心にかなっているのだと実感しました。



■良い祈りと黙想の機会が与えられたことに感謝。「“盛年”まで生かされている私」に気づかせていただきました。年齢の縛りがうまく働き、教会ではマイノリティーの世代が集い、祈りを通して強められた２日間だと感じました。　信仰教育委員会

祈りを学ぶ

教会学校研修会

河原町カトリック会館　10月17日㊏

今年の教会学校研修会には、７ブロック16小教区から28名の教会学校リーダーが参加しました。昨年の研修会後に行ったアンケート結果の中から、「祈りをどのように子どもたちに教えるのか？」という課題を取り上げ、北村善朗師に講師をお願いしました。

北村師は「この研修で大切にしたいことは、決まった『祈りを学ぶ』だけではなく、イエスさまが、わたしたちを先に友としてくださっていることを出発点とします。自分自身とイエスさまとの関係を見つめ、祈りを『イエスさまとの友情を生きること』として考えます。また、教会学校のリーダーが、『祈ること』を体験し、その意味を正しく知ることなしに、子どもたちに『祈り』を教えることはできません」と話されました。

①祈りとは、誰との関わりなのか　②イエスさまとともに父なる神に向かう　③イエスさまとの友情を生きる　④その友情に子どもたちを招く、というセッションに分けて講話があり、それぞれの講話の後、祈りの時間と分かち合いの時間がありました。



講話、祈りの体験、分かち合いをとおして、ふだんの教会学校で子どもたちとともに「イエスさまとの友情を生きている」恵みを実感し、感謝した研修会でした。

信仰教育委員会

冬プロジェクト　ご案内

青年の皆さんいかがお過ごしでしょうか。冬プロジェクト（冬プロ）のご案内です。

冬プロは一年の締めくくりとして、現役の青年だけではなくＯＢやＯＧの皆さんも一緒に交流を深めようというイベントです。

ド年末でお忙しいと思いますが、皆さんにお会いできることを楽しみにしております！

日時：12月29日㊊ 17:00 受付開始　18:00 分かち合い　19:00 夕食、交流会
　　12月30日㊋ 10:30 ミサ（ミサ後解散）
　　日帰り参加、ご家族の参加も可能です！
場所：カトリック宇治教会

参加申込・詳細は、京都カトリック青年センターＳＮＳでご案内いたしますので、情報チェックしていただければ幸いです。

皆さんの近況を聞かせてくださいね～！

運営委員/西院教会　粟井（あわい）　幹（もとき）



青年センターあんてな

お　知　ら　せ

司　　教

大塚司教の予定
最新の情報は京都司教区のホームページにてご確認ください。

教　　区

聖フランシスコ・ザビエル司教座聖堂献堂記念日ミサ
日時：12月３日㊍ 10:30
場所：カテドラル河原町教会
司式：一場 修神父

小森はるか監督作品映画上映とトークセッション
映画『春、阿賀の岸辺にて』『おあがりんちょ』
トークセッション（出演者と監督）
「本当の支援を模索する―新潟水俣病患者さんと共に生きる経験から」
日時：12月６日㊏ 13:30～17:00
（開場13:00）
場所：河原町カトリック会館地下２階大ホール
定員：70名　チケット前売2,000円
問合せ：京都教区カトリック正義と平和協議会
（075-223-3340㊊㊋㊍ 10:00～17:00）

■教区時報２月号の原稿締切日は12月13日㊏

訃　報

京都司教区司祭 アロイジオ 花井拓夫師



老衰のため、京都市内の病院で帰天されました。94歳でした。
長い年月、京都教区のためにお働きくださいました。
花井神父様の永遠の安息をお祈りください。

1932年５月７日　三重県にて誕生
1965年３月28日　司祭叙階
2025年３月28日　司祭叙階60周年
2026年10月25日　帰天

諸　団　体

ノートルダムクリスマス2026
日　時：12月17日㊍ 14:00
場　所：京都ノートルダム女子大学
ユニソン会館
内　容：聖劇・音楽・祈り
前後にミニバザー
入場無料・予約不要
問合せ：学校法人ノートルダム女学院
法人本部事務局 075-723-1072

京都カトリック混声合唱団
12月13日㊐ 14:00　聖歌練習
12月26日㊏ 17:30　練習後ミサ奉仕
場　所：河原町教会聖堂　団員募集中
問合せ：則武 隆 075-951-4283

コーロ・チェレステ（女声コーラス）
練　習：12月10日㊍ 10:00
場　所：河原町教会２階楽廊 新会員募集中
問合せ：駒井和子 075-561-5971

聴覚障がい者の会・京都グループ
クリスマス手話ミサとパーティー
日　時：12月15日㊋ 受付 10:30
手話ミサ 11:00
パーティー 12:00（ランチ持参）
場　所：河原町教会小聖堂と
地下ヴィリオンホール
（手話能力に関わらずどなたでも参加できます）
問合せ：鎌田 修 090-1967-5636
kamadaosamu@gmail.com

心のともしび
ラジオ番組案内（全国34局で放送）
12月主テーマ「神からの贈り物」
ＫＢＳ京都　㊊～㊎ 朝５:55　㊏ 朝５:15
ラジオ関西　㊊～㊎ 朝５:00　㊐ 朝６:05
毎日放送　㊊～㊎ 朝５:45　㊏ 朝４:55
＊ラジオ関西は12月25日に特別番組「チャリティ・ミュージックソン」を放送するため日時が変更になる可能性があります。詳細はホームページでお知らせいたします。

カトリック京都働く人の家
読書会・遠藤周作「イエスの生涯」
日　時：12月13日㊐
九条教会９時ミサ後
場　所：九条教会内働く人の家
対象者：どなたでも
問合せ：瀧野正三郎 090-8207-1831

皆さまのまわりに点訳版「京都教区時報」が必要な方がおられないでしょうか。点訳版「京都教区時報」をご希望の方がおられましたら、「点訳ネット・レジナ」笠松幸彦さんまでお申込みください。無料でお送りします。
Tel・Fax/072-722-0271